

普段着のわたしたち



終活中のおばあちゃんにいただいた陶器の枕。硬くて痛いイメー

ジでしたが、微妙なカーブが案外とよろしくて。何よりひんやり冷たいのがこの時期の休息には結構オツなもの。

邯鄲の夢でも見ましょうか。 **訶梨帝母**

もし、夏休みに京都へ遊びに行こうという方は、是非、六道珍皇寺の「六道まいり（8月7日から10日まで）」を覗いてみてください。このお寺には冥途へつながっている井戸があり、盂蘭盆で里帰りされるご先祖さまは、この井戸からこの世へ出ていらっしゃいます。

六道参りはご先祖さまを井戸までお迎えにあがる行事です。ご先祖さまが六道の辻で迷わないよう、参詣者は「迎えの鐘」をつかさねさせていただきます。ご先祖さまはその音を頼りに井戸から出てこられ、魂は用意した高野槇の枝にお乗りになります。それを丁重に家まで運ぶのです。この5日間

は、そんな京都の人々で朝から夜遅くまで賑わいます。 **俊徳丸**



5月に東部青年会の旅行で長崎に行ってきました。

初日は長崎の平和公園などをめぐり、戦没者慰霊の読経をし、長崎原爆資料館の見学などをしました。二日目には軍艦島の見学へ。数百枚の写真を撮ったのですが、一番思い出深いのがこの一枚です。長崎名物トルコライス。ピラフ・ナポリタン・トンカツの三重奏。名物に美味しいものなし、と



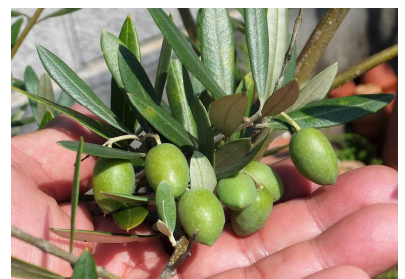
いうのは嘘ですね。ナポリタンにご飯って合うんです。

征阿

境内のオリーブの実が大きくなってきました。これを絞って、塩・胡椒・レモン汁と一緒にドレッシングを作るのが楽しみです。オリーブの実を絞っただけのオイルの中でも、香りや成分の基準を満たした一部ものだけをエクストラバージンオイルと呼びます。このオリーブが果たしてエクストラバージンに匹敵するか否か。興味津々！

それにしても、昔は上司からよく油を絞られた。

迷走坊



『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は <http://www.daigoji-temple.jp/> 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

息子が四歳になり、少しずつ読書の時間が戻りつつあります。ここ数年は絵本を読み聞かせして背中をトントンしているうちに自分も寝てしまうという日々でしたが、一人でコロンと寝てくれるようになったので、私も好きに本が読めます。

以前、友人と「記憶に残っている最初の本は何だった？」という話をしました。童話など含め思い出すものは数々あれど、私がとても印象的に記憶している本は、小学校の教室の後ろにあった学級文庫で『ハンカチの上の花畑』※という本です。

ある日、若い郵便配達員がおよそ人が住んでいるとは思えない古い家に配達に行きます。暗い家の奥から老婆登場。老婆は配達員を家の中に招き入れ、配達のお礼にとお酒を勧めます（仕事中ですけど）。老婆は古びた空のツボを机に置き、横に白いハンカチを広げ呪文のような呼びかけをすると、ツボから小人の家族が出てきてハンカチに何やら蒔き始めます。たちまちハンカ

こもりうた③1

チの上は菊の花畑に。次にそれをせっせと収穫して小人達は菊の花とともにツボに帰ります。暫くして老婆がツボを振るとチャポン。お酒ができていくという顛末。その菊の芳香のお酒は彼がかつて飲んだどれよりも美酒。そして老婆は彼にそのツボを暫く預かって欲しいと言います。誰にも見つからないように一人で楽しむ分にはいくら作って飲んでもいい。しかし、この事を他人に見られたり、菊酒を売ってお金を得てはいけないという約束で。しかし、やがて月日は流れ、真面目な彼の身の上いろいろな事情ができて、とうとう売ってお金を得てしまいます。ハンカチ一枚広げては五合瓶一本

分しかできないので、風呂敷を広げて一升瓶分の酒を作る技まで習得します（小人達へトへト）。そんな時、その古い家の跡地に「菊屋酒店新築工事」の看板。やばい！老婆が戻ってくるかも！

その後はおよそご想像に近い結末が訪れるのですが。

今思えば、小学生低学年の学級文庫にしてはシュールで妙に暗示的な内容だった気がします。「古い蔵の洞窟のような部屋、ツボ、幽霊のような老婆」の挿絵もオドロオドロしい感じでした。ただ、その菊の香りのお酒というのが小学生の私に刷り込まれました。それを探し求めて今に至るのだと推測します。（酒好きのコジツケ）

さてその会話をした友人、暫く後に『ハンカチの上の花畑』を探してきてくれました。当然ながら既に絶版、古本をネットで発見したとの事でした（生涯の感動的な贈り物ベスト5に入ります）。それ以来、私の大切な蔵書の一冊です。

さあお盆。よく冷えたお酒に菊の花でも浮かべて、亡き師僧とご先祖様をお迎えしましょうか。献杯！

※一九七三年、

安房直子作



訶梨帝母

お経が実践されている！

さんほうらい
三宝礼

一心敬礼 じつほうほうかいじょうじゅうぶ
 一心敬礼 じつほうほうかいじょうじゅうぶ
 一心敬礼 じつほうほうかいじょうじゅうぶ
 一心敬礼 じつほうほうかいじょうじゅうぶ
 一心敬礼 じつほうほうかいじょうじゅうぶ

一行目は、宇宙に永遠におわします**佛**を

一心に敬い礼拝いたします。二行目は、佛

が説かれた**法**（教え）を一心に敬い礼拝い

たします。次の三行目です。**僧**を出家者と

狭い意味にとらず、「僧伽（そうぎや）（サンスクリッ

ト語でサンガ）」道を同じくして集う人々

と広い意味にとると、世界が変わります。

学校の場合ですと、佛を熱心な先生、法

を優れたカリキュラム、僧を励まし合う生

徒たちに置き換えてみてはどうでしょう。

職場の場合は、佛を優れたリーダー、法

を徹底した社員教育、僧を意欲のある社員

と置き換えてみては。

隣町に、鍋屋バイテックさんという機械

部品メーカーがあります。文化活動にも熱

心で、工園（工場と呼ばない）内に美術館
 を兼ねたコンサートホールをお持ちです。

三月に行われた演奏会に応募したところ、
 抽選に当たって招待を受けました。（滅多
 に聴く機会がないピアノ三重奏曲です）

この会社の親会社ナベヤさんは拙寺の梵
 鐘を二回も鑄造していただいた会社です。

白蟻被害に遭って取り壊した山門は、梵鐘
 が二階に乗った鐘楼門であることで再建が
 促進されたと深く感謝していました。

文化活動担当の事務局長さんへ演奏会の
 礼状を差上げた際、江戸時代からの長い
 ご縁への言葉を添えました。これが会長さ
 んの元へ回ったようです。

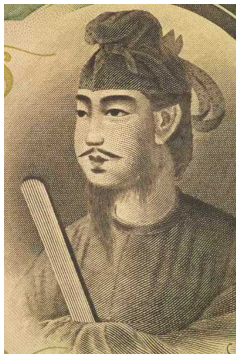
七月の演奏会では、バイテックの会長さ
 んからご挨拶を受けた後、親会社のナベヤ
 の会長さんにも紹介されました。

数日後、親会社のナベヤの常務さんが営
 業担当のベテラン社員さんと一緒にお越し
 になりました。目的は拙寺の梵鐘をご覧に
 なり、史料を確認されることです。

現在の梵鐘は戦後の昭和二十三年（19
 48）の鑄造ですが、銘文から、寛延四年
 （1751）に造られ、戦時中に供出した梵
 鐘も同じ一族の製造と判ります。ところが、
 それはナベヤの現会長岡本太右衛門定温氏
 のご本家のそのまたご本家岡本伊右衛門氏
 が造られたもので、社内で記録が確認でき
 ていなかったのです。

永禄三年（1560）創業。朝廷より賜つ
 た「鍋屋」の商標をもつ金属系加工業とし
 ては日本最古の会社は、たった一通の礼状
 にほんの一行記された三六六年前のことを
 ゆるがせにしかかったのです。

篤く三宝を敬え 三宝とは佛法僧なり



「違うだろ、
 このハゲ」と叫
 んで連日ワイドシ
 ョーを賑わした方、

『十七条の憲法』全文を一度お読みになっ
 ては。テレビ局の皆さんも。

珍しい「食事」！レポート

先日、めったに食べることができない珍しい食事を経験しましたので、ご紹介したいと思います。撮影はできない場所なので写真が無いのが残念な限りですが…。出来るだけ詳細に！

● メインのお皿

- ① 大きなエビフライ 1本
- ② ヒレとんかつ 2枚・
- ③ ウインナー 2本
- ④ ポテトサラダ
- ⑤ キャベツとレタスとトマトのサラダ

● 小鉢2品

- ② 里芋の煮つけ
- ②わかめとウナギの酢の物（うなぎ小2切れ）

● ひじきご飯（どんぶり茶碗）

● イワシの「つみれ汁」

● メロン1切れ（来客のため特別だと思います）

以上のメニューが無機質なお盆と食器にもられ、とてつもなく広い食堂でいただきました。ちなみに毎週金曜日のお昼はカレーライスだそうです。「金曜日のカレーライス」で、もうおわかりでしょう。これは、関西のある陸上自衛隊駐屯地のお昼ごはんです。自衛隊の食事はおいしいと聞いていましたが、その期待は裏切られることはありませんでした。

3月下旬に陸海空とも入隊すると、「自衛官候補生」として「教育隊」に所属し自衛官になるための基礎訓練等を3か月間受けます。私が想像していたよりも遥か！多くの隊員が挫折し辞めていました。そんな中、3か月間耐え抜いて今日を迎えた新隊員を祝福する「自衛官候

補生過程修了式」にその家族も招待されるのです。それで、私もその出席者として駐屯地内にいるわけです。厳粛な式典の後、「祝い膳」として隊員の皆さんと一緒にいただきました。正午になると昼食を知らせるラッパが響き渡り、ここが「別世界」であることを再度認識しました。食べ始めてとにかくすごいボリュームです。一般男性が接種する一日分の理想カロリーより、1,200カロリー多いメニューになっているそうです。私は半分しか食べることができませんでした。教育隊の3か月間は、この量の食事を3食とも10分以内で食べなければならなかったそうです。食事も訓練なのです。それでも体重が2キロ減ったそうです。朝、駐屯地に入場して迷彩服姿で89式自動小銃をもった人が目の前を普通に歩いて行った時も驚きましたが、日頃この食事を摂っているこの駐屯地に所属する何百人の隊員や管理職の方も含め、メタボ体質の人を全く見ないのも驚きであり、さすが！だと思いました。食堂の入り口にもありましたが、駐屯地内のいたるところに筋トレをする所が設けられていました。

この駐屯地の食堂では社食のようにメニューを選ぶことはできません。自分が苦手なものも出てくるはずです。しかし「団結力」を強くするため全員が同じものを食べるのだと思います。特に「バディ」と呼ばれる相棒の存在は断固たるものです。お互い支えあった仲間があったからこそ修了式を迎えることができたのだと、ひじきご飯を噛みしめながら感じました。

…駐屯地内に「居酒屋」があるのにはびっくりしました。店名『花の里』です。俊徳丸

『私説法然伝』(31)

極楽への道⑥

先月号では「日本における念佛のはじまり」について書きました。今月はその続きになります。

【比叡山延暦寺にて確立された「山の念佛」とはどのようなものであったのだろうか。^{みなものためのり}源 為憲が記した『三宝絵詞』によれば「秋八月の風涼しい時、中旬の月の明るい頃、十一日の暁から十七日の夜に至るまで、不断に行じられる」とあり、また「身は常に阿弥陀佛を廻るから、身の罪はことごとく無くなってしまう。口には常に経を唱えるから、口の咎が消えてしまう。心は常に佛を念じるから、心の過ちはすべて尽きてしまう」と記されている。そして重要となるのが「阿弥陀經に、若し一日、若し二日、若し三日、乃至七日、一心不乱臨終の時に心顛倒せずして、即ち極楽に生まれると。七日間に限るには、この経説に

依る」とある。身と口と心、すなわち私たちの身体と行いが作り出す「罪」を念佛によつて消し去ることによつて極楽浄土へ生まれる事ができるようになるという理解がなされていたのである。この比叡山における念佛の流れの中から生まれでたのが空也上人と恵心僧都源信である。空也上人は今日では空也上人像が有名である。平安時代中頃の僧侶で、阿弥陀聖とも市聖とも呼ばれる。延喜二十二年(九三二年)尾張国分寺にて出家し、在俗の僧侶として諸国を廻り「南無阿弥陀佛」と称えながら道路や橋、寺院建立などの社会事業を行ったとされる。やがて比叡山延暦寺にて授戒し「光勝」という名を授かる。六波羅蜜寺の本尊十一面観音菩薩立像は天曆五年(九五一年)に空也上人が西光寺を創建した際の本尊とされている。鴨 長明編の『発心集』には「これを我が国の念仏の祖師と申すべし」と空也上人についての記述がある。空也上人は鉦や太鼓などの楽器を用いた踊り念仏をおこなったと伝えられる。市井の中において口称の念佛を人々に伝えられたの

である。その影響は後世の念佛者たちにも与えている。」

比叡山延暦寺においてはじまった浄土佛教の流れ、それを「山の念佛」とも言いますが、その中で様々な僧侶たちによつてその流れがさらに発展していくことになりました。特に有名なのが空也上人と恵心僧都源信です。空也上人について知る人は少なくとも、京都の六波羅蜜寺に伝わる康勝作の「空也上人像」を知る人は多いでしょう。空也上人は「聖」と呼称される、諸国を廻りながら勧進(布教活動と寄付の募集活動)を行う僧侶でありました。

以下次号に続く(征阿)



空也上人像

観経物語(108)

正宗分(しょうじゅうぶん) その62

散善(さんぜん) 上品上生その5

《本文その3》

彼の国に生まれんとするとき、此の人、
精進勇猛なる故に、阿弥陀如来は観世
音大勢至、無数の化佛、百千の比丘、声聞
の大衆、無数の諸天、七宝の宮殿と与にす。
観世音菩薩は、金剛の台を執り、大勢至
菩薩とともに、行者の前に至らん。阿弥陀
佛は、大光明を放ち、行者の身を照らし、
諸菩薩とともに、手を授けて迎接す。
観世音大勢至は無数の菩薩とともに、行者
を讃嘆し、其の心を勧進す。行者は見己
わりて、歓喜勇躍し、自ら其の身を見る
に、金剛の台に乘れり。佛の後ろに随従
するに、弾指の如き頃に、彼の国に往生す。

《意味・訳文》

彼の国(極楽浄土)に生まれようとする
(往生の瞬間の)とき、これらの(上品上生

に区別される)人々は、佛道に励む心が勇
猛であるために、阿弥陀如来は、観世音や
大勢至、衆生を導き救いの手を差し伸べる
(「済度」のためにこの世にあらわれた無数
の化佛たち、幾百幾千もの比丘と呼ばれる
専ら修行に励む僧たち、法を聞いて止めて、
心を静め、邪念や煩惱を消除することに専
心する声聞といわれる僧たち、無数の諸天
神が七つの宝石で飾られた宮殿を伴ってあ
らわれる。観世音菩薩は金剛石の台座を手
に取り、大勢至菩薩とともに、その行者の
前に進むであろう。阿弥陀佛は大きな光明
を放って行者の身体を照らし、諸菩薩とと
もに、その手を差し伸べて行者を迎え、相
いみみえ接見す。観世音と大勢至は、無数
の菩薩とともに、行者を讃嘆し、その心を
励ます。行者は佛菩薩を見終わって歓喜の
あまりに小躍りし、ふと自分の身を振り返
ってみると、いつしか金剛石の台座の上に
乗っているであろう。佛の後に従って行く
と、たちまちの間に、浄土へ往き生まれる
のである。

《私訳》

他力の信心(「佛力に帰依するところ」
↓
釈尊は至誠心・深心・廻向発願心に分
解して示してみえる)を得た人達を、こん
どは自力修行の行動の傾向や様子別に分類
をしておられる。つまり他力の信を得た人
は、三福の修行のうち、行福を修行したか
ら得られたのではなく、これから往生を願
う行者に、実際に修行に励むように勧めて
いるわけでもなく、行者の他力に帰する以
前の行動行為や、他力に帰した後でも自力
修行に向かいなくなる行者の心の性向を、
私たち衆生の《凡夫性》として、一見上
品上生の人と、褒め称える風にみせて鋭く
示しておられる、と思います。

《妙星斎》

